阿部知二全集

第5巻

阿部知二全集

第5巻

河出書房新社

阿部知二全集　第5巻

一九七五年四月十日　初版印刷
一九七五年四月十五日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話（〇三）二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

朝霧 5
緑衣 125
本郷 177
かげ 188
パリ島の記 227
死の花 251
解題 福田久賀男 289
解説 杉森久英 296

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

阿部知二全集　第5巻

朝

霧

序章

……この物語を何年か前の、筆者の北満州の旅の想出から書きはじめることをゆるされたい。

その五月のはじめのころ、私は黒龍江のほとりの地方を、辺境の開拓地など訪ねてあるいてゐた。――ある日の午後、拓殖会社や県公司の人など数人といつしよに、陰鬱な顔をした満人の運転手が手荒に操縦するトラックにはげしく揺られながら、丘陵のうねりを上り下りして走つてゐた。高みを走るときには、はるか左手の方に、蒼黒い水に流氷をただよはした黒龍江が峡をうねりながら天の涯までも連るやうに流れてゆくのが見おろされ、その向うにはソ連邦の山々と野と森林とが、低く暗く垂れた雲塊の下に眼のかぎりひろがつてゐた。風は身を切るやうに冷くその北方の山野の方から吹きつけてきて、がうがうと鳴りながらこの荒寥とした丘陵の波のうへを四方に渦巻き渡つて行つた。その風を切つてすすむトラックは、しばらくは、一尺か二尺ほどにしか伸びないで低く地を這つてゐる枯れ櫟におほはれた斜面を走つた。南方の空の片隅の雲が裂けると、しらじらと冴えた陽の光が縞目になつてこの枯原にふりそそいだのだが、その蒼白い明るさが、いつそうに物さびしく寒寒とした心を起させ、その光が櫟の根元に射し入つて地肌を明るませるところをみると、もはや春を待ち切れないのだといふやうに、草ほどにしか伸びぬつつじが淡紅の花をひらきかけたり、名も知らぬ濃紫の野草が蕾を割らうとしてゐたのだが、その色彩がまた、ひとしほ痛ましくいぢらしく感じられるのだつた。

まもなく黒龍江は丘のかげに隠れ、トラックは、路とも名づけられぬ坂をころげおりて、陽の光も射さぬ沼沢地に入つて行つた。そこも一面の枯草原だつたが、それに蔽はれて沼や小流が入りみだれてゐるのであらうか、物音におどろいて雁があちこちに飛び立つたりした。トラックは、この二里四方ほどの沼地を横切るためには、黒い泥土帯に車輪をぬめり込ませないやうにと、のろのろと用心深くすすまなければならなかつた。

「人がゐるぞ！」と、そのとき車上の一人が叫んだ。

瘴気でも立ちのぼつてゐるのであらうか、うす青く煙つたやうにみえる向うの峡の出口の、ひよろひよろとどろ柳が数本立つてゐるあたりに、二人の男が馬に乗つてこちらの方に向つてくるのが見えた。

トラックは立ちどまり、いつたいあれは何ものだらうかといふ評議がしばらくはずんだが、そのうち沼沢地のふちを迂回しながらその人影は近づいてきて、しだいに眼には

つきりと入るやうになつた。前の方の馬に乗つてゐる男は銃を背負ひ、腕をふりあげながら何かこちらに叫びかけてゐる様子であつたが、その声は、沼地のうへを渦巻きながら四方の山壁にぶつかつてゐる寒風の叫のなかに散つて、ひとつも聴きとれはしなかつた。

「日本人だ。」と一人がいふと、

「ツバキ君ぢやないか？」と県公司の人がいつた。

「さうだ、それにちがひない。奥から帰つてくる時分だ。」

「待つてゐて連れて帰つてやらう。」

その人影が近づくまで、停止したトラックのうへで、私はその「椿晋一」といふ人物についてのことをきかされた。

——二年ほど前から、この北辺の調査の仕事を行つてゐる青年で、この方面の奥地一帯をあるきまはつてゐるのださうだ。何でもその椿青年は、ことさらにかうした人跡も絶えた、日本人などがまだ入つたこともないやうな地にゆく仕事を志願して、一月でも二月でも、オロチョン族が徘徊する森林地帯や不毛地を探険し、——いや放浪することを好むのださうだ。

「まだ若いのにな。変つた男だよ。」

「東京の男だつていふぢやないか。」

「高等学校に途中まで行つてゐたつていふぢやないか。」

——文庫本なんかしじゆうふところに入れて、オロチョンの中へ入つてゆくんだからな。」

さうした会話には、その椿といふ若者についての興味とともに、微かな反感のひびきがこもつてゐないでもなかつた。

——そのうちに、二人の男はいよいよ近づいてきた。後の馬に乗つてゐるのは苦力だつた。二匹の馬は全身が泥だらけになり、あきらかに疲れ切つて喘いでゐたが、馬上の二人にしても、その服は泥じみ、ところどころは裂けやぶれたりして、見るからに痛ましい長旅の跡をとどめてゐた。どす黒く日に焼け、髭がのびほほけた椿は、肩に銃を負ひ、腰には打ちとめた雁と、栗鼠の皮と、ノロ（羚羊の一種）の角とをぶらさげてゐた。もし、私が一人で、このさびしい沼地の中でこの男に出逢つたのであつたならば、到底日本の青年だなどとはおもはないで、恐怖の感に打たれてしまつたであらう。

椿はトラックに擦り寄つてきて、Kの街まで帰られるのならば、馬が疲れて困つてゐるところだから、この車に乗せて行つてもらへまいか——と、おそらくは数十日目にはじめての日本語をていねいに使ひながらお辞儀した。髭に蔽はれた口元には、何かしらまだあどけなさがただよひ、ちらとのぞいた白い歯が、ふしぎに私の心に残つた。

お安い御用だ、とみなが快活に一斉にこたへて、そのほ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ろぼろの男の肩や腰をトラックのうへからつかんで乗せ上げると、満人の運転手は勢よくエンヂンを動かしはじめ、われわれはまた沼地をつききつてKの街の方に帰途についた。苦力は椿の馬を引つぱりながら、別に恨めしさうな顔もしないで、後からのろのろと追つてくるのだ。――椿はちやうど私の席のとなりに投りこまれたのだつたが、私はそのポケットからジーンスの「神秘なる宇宙」の訳本がのぞいてゐるのをみた。

「どこに行つて居られたのですか。」と私は煙草を差し出しながらたづねてみた。

「一月半ばかり、興安嶺のなかを調べてあるいてゐました。御視察ですか。東京からですか。」椿もこの辺に見なれぬ私に多少興味を持つたらしく、そんなことをたづねた。

かうした偶然のことから、Kの街にかへる数時間のあひだ、私たちはいろいろの話を取りかはしつづけたのだ。

椿の旅の物語はおどろくべきものであつた。ロシヤ式の長銃を肩から斜にかけ、胸には山刀を下げ、馬をみごとに操りながら山野に獣を追ふオロチョンの生活は、私たちがきいて嘘としかおもへぬほどのものだつた。ダムダム弾で獲物をたふすと、オロチョンはまづその獣の大動脈をぶち切つて、口いつぱいにその血潮を浴びながら飲みほし、それから頸椎骨を叩き切り、ぽろりと首をおとすと、その皮をくるくると剝ぎはじめ、それから胸の中の鮮血を椀にすくつて飲み、それから胃、肝臓、膵臓、腎臓、生殖器、乳房などを切りとつて、小刀でけづりながら食べてゆく……かうした話を、別に私を興がらせようといふ目的でもなく、ただ日常の茶話のやうに、動揺するトラックのうへで話してくれた。

*

そのうちに、東京では私の近くに住んでゐたのだといふことも分り、親しくなつた私たちは、その夕はKの街の満人が経営する江畔の露西亜料理店の二階で食事をともにした。

窓のそとは、やうやく柳が青みそめた河岸であり、そのすぐ下からは、満々と解氷期の蒼濁りの水をたたへた黒龍江が流れてゐる。北方の宵はいつまでも青白さがただよつてはゐるが、空には青白い星がいつのまにか光りはじめ、気温は急に下つて日本の冬のやうになる。すると河にみちた氷塊は急に力を得たやうに、水の面もみえぬほどにひしめきあひ打つかりあつて、みしみし、がりがり、がちやがちや、どろどろ、――あらゆる響、といふよりは叫喚を立てながら盛り上つてきて、蒼白い微光の中に牙のやうに白く光る。その流の向うは、河霧にややおぼろではあるが、ソ連邦のBの街の灯がみえる。一きは大きな四階建のもの

は兵舎でもあらうか。氷塊の響きの上を渡つて、さつきから耳に異様にひびく唄声が喚声にまじつて流れてくるし、ときとするとやはり聴きなれぬ旋律のジャズの音がきれぎれにつたはつてきたりする。河上の氷は、近くに相距てた二つの国の中を、その対峙を悲しみあるひは笑ふかのやうに、あやしい物声をたえず立てながら渦巻く水流に押しながされながら、深く霧が立ち罩めて暗々とした東方に向つて消えてゆく。

どろどろに煮つまつた豚肉や、揚物や、脂こい味のついた苽子や白菜やを頬ばりながら、椿は火酒をのみ、私は風土のせゐかしきりに泡立つ麦酒を飲んでゐた。麦酒は歯にしみて冷たかつた。

窓の外の堤の薄明りのなかには、それでも春の宵のそぞろあるきを待ちかねてゐたのだといふやうに、街の方から来た日本人や満人が、三々五々散歩するのもみえたが、しばらく対岸のソ連の街の灯、とどろく氷塊の流などをみつめてゐるうち、寒い河風に耐へられなくなつたのか、それとも春はやつぱり来てゐないのだと諦めたのか、またすぐに消えて行く。しかし、さつきから、水ぎはにほんのかすかに猫芽を吹き出したばかりの柳のかげに、いつまでも立ちつくしてゐるものがある。青い服を着た男と白い外套の女だ。腕を組み合はせてひしと寄りそつたまま、身うごきもしないで、対岸の灯をみつめてゐるのだ。闇に二人の金髪がうすく光つてゐる。

「向う岸に帰ることのできぬロシヤ人ですね。」

「彼らは北の方に向つて望郷の思をいだくのですね。——ぼくたちと反対ですね。」

——さうした会話が糸口になつて、椿と私との対話は、思ひがけなくも急にしみじみとしたものになつてしまひ、椿の口からもれるものは、もはやオロチョンや興安嶺の密林の話ではなく、その数年前の内地での生活の想出であつた。私ははつとおどろいたけれども、もはや椿の感情の流の堰はとどまらなかつた。私たちは、水ぎはの男女の影がしだいに闇におぼろげになり、また気がついて見ればいつのまにか立ち去つてしまつて居たときまで、その物さびしい料亭の卓をかこんで酒をくみ、話をつづけた。

翌日、私が南にかへるために乗つた汽車に、偶然にも椿が乗り合はせてゐた。仮りにその生活の本拠としてゐる北満の野の中のP市まで一度かへつて、それからまたどこかの未開地にでも命を受けて出発するのだといふことだつた。その汽車の中の一日がまた私たちの話をつづけさせた。

——それから一月ほどして東京に帰着した私のところに、ノロの角と一緒に、椿の手記様のものや書簡類が送りとどけられてきたのだが、それを元として、誤りやすい筆で一

つの物語をつづるといふのは、心なくもまた罪あるわざでもあらう。だが、それは椿にとつては何ごとでもあるまい。もはやその過去の日々のことは、何の悔もおこさず何の懐しさも感じさせないともいつた。どこかの開拓地にはたらいてゐる逞しい娘でもめとつて、一生をこの奥地に暮すといふ心持に動揺はないといつた。あるひはこれは読者にとつても——今とはさまざまの点で異つた一時期の若者たちの物語であるだけに、興味の深いものであるかどうかも分らぬ。

Pの街が近づいて私たちが別れを告げなければならなくなつたのは、その日の夕暮だつた。汽車の窓のそとの大海のやうな曠野の向うには、野火の煙が龍巻のやうに空に立ちのぼり、その奥に真紅な太陽が沈まうとしてゐた。褐色の枯野に流れるその落陽の光は、ふしぎに濃紫の色をしてゐて、眼のかぎりが燦としてまぶしかつた。人はよく大洋の美、ことにその落陽の美が、地上のなにものにも立ちまさつたものであるといふが、それは、自然は単調と見えるものの中にこそ無限に複雑な線条と色調とを秘めてゐることを証すものであらう。しかし、この北満の曠原のただ褐色の土のうねりは、海よりも単純な眺であり、それゆゑにこそ、いまのこの落陽の美は、大洋のそれよりも変幻に富み複雑な色調にみちたものなのだ。この趣きを文字であらはすことも、絵画であらはすことも不可能かも知れぬ。ただどこかの狂気じみた音楽家が、憂鬱な、それでゐて限りなく甘い、霊魂的な、それでゐてはげしく肉感的な旋律を以て象徴的にあらはしでもしてくれなければ、手のつけやうもないものであらう。——野の落陽に見入りながら私はそのやうな感想にふけつてゐたのだが、それはまつたく椿の物語をすることとはかかはりもなくおもはれよう。しかし、私にとつては、その感慨と、その時私の前の席でやはり同じやうに外を眺めながら、野火と太陽との方を顎でさしながら、Pの街で数日も憩へばまたあの辺りに出かけるでせう、といつた椿の顔とが、結びついて離れぬものになつてゐるのだ。紫の色をおびて窓ガラスを透してくる落陽の光を浴びた椿の顔には、逞しい原始人のやうな猛々しさの底から、その紫紅色の光線に透かし出されたやうに、感傷的な神経質な少年の表情がちらと浮び上つたりしたのだ。——しかしその表情も、その後もつづく艱難と危険とによつて削り取られて行き、まもなくその跡方も無くなることであらう。いや、その時の表情自体が、私が落陽の手品に魅せられて、一人勝手に感傷の色で染めたといふことだつたにすぎぬかも知れぬ。——何はあれ、日暮のP駅の苦力たちの混雑のなかに、リュックサックを背負つて後も見ずに消えて行つた椿の後姿を思ひ出してみるにつけて、

私は、よくもさうした過去を振りすてたものだと、感じ入るのである。

前篇

一

S市の東の郊外一帯に起伏する丘陵は、いま眩しいほどの青葉にかがやき、その起伏のあひだに入江のやうに入りこんでゐる平地には、穂麦が波立つてゐる。

一筋の白い砂利路が、その丘の灌木林のかげにかくれたり、傾斜面の赤松林を突きぬけたり、麦畑のほとりにうねつたりしてつづいてゐる。さつきから路のうへを、ひつきりなく、白い運動シャツをきた若者たちが、汗でびつしよりと濡れ、息をはずませながら、走つてゐる。一人だけ走つてゐるものもあり、また三人五人とかたまつて走つてゐるものもある。みな二十歳前後の若者だ。

椿晋一は、櫟におほはれた丘の切通し路をかけぬけて、小さな寺のある森かげの平地まできたとき、息切にくるしくなつて、おもはず路傍の青草のなかに腰をおろしてしまつた。

「や、二年の文甲二か、だめだぞ。去年もビリだつたぢやないか。」無精髭をのばして赤い鉢巻をした若者がその前を駆けすぎながら、あざわらふやうに叫んで行つた。——

この高等学校では、毎年晩春か初夏の頃に、各クラス間のマラソンの競争がある。平均してもつともいい成績を取つたクラスが優勝するのだが、たしかに椿のクラスは去年はもつともみじめな成績だつた。

立ち上らうとする前を、また何人かが走り去つた。その何人か目に、同じクラスの、寮では隣の室の、庄司久作が向う鉢巻をして、まるで馬のやうに脚をぴよんぴよん弾ねあげながら勢よく走つてきたが、椿をみると瞬間立ちどまつた。

「どうしたんだ?」息をはずませながらたづねた。「君にしては、すこし速すぎたとさつきから思つてゐた。俺よりも先にかけるんだからな。君がおれたちのクラスぢや二人目か三人目だよ。——まつたく驚いたことだとおもつてゐたら、たうとうへばつたんだな。」

「咽喉がかわいてね。」晋一は、ふだんあまり親しくもない庄司が、いま自分を賞めてゐるのか、ねぎらつてゐるのか、それともからかつてゐるのかといぶかしみながら、腰を上げた。

「去年は君たちのグループは、まさか相談し合つたんでもあるまいが、半分も走らんうちに落伍したぢやないか。それに今日はあんな勢で走るなんて、少し無理だとおもつたら、はは、たうとうこんなことぢやないか。だが、君の意気はなかなか面白い。さあこんどは俺といつしよに走らう。クラスの名誉のためだ。」

(おれはそんなものの為に走つてるんぢやないんだ。)といふやうな色がちらと晋一の眼にはうかんだが、それでも黙つて立つと、いつしよに走り出した。

「だいたい、おれたちのクラスが不振なのは、君みたいに東京からきた青年が多いからなんだ。弱いくせして、口ばつかり達者で、——さういふ浅薄な競争心なんか知らんこつた、といふ気があるんだ。——ところが、今日の君の態度にはすつかり感心した。じつは今まで君を変な奴だとおもつてゐたが、この調子でやつてくれるなら俺はあやまつてもいい。単純にあやまる。——さあ、走れ。」

数丁走つて、十人ばかり抜いたところで庄司は一息入れて、うしろから歯をくひしばつて走つてくる椿をみてさういつたが、返事はなかつた。

「おや、顔が真蒼ぢやないか。——まさかこの新緑の反射ぢやあるまい。なんだか脂汗をながしてゐるぢやないか。どうしたんだ?」

「咽喉が……」

「困つたな。」庄司はあたりを見まはしたが、

「さうか、ぢや、一寸とあそこの家で水でも飲まう。」と、顎をしやくつて、木立につつまれた地蔵堂のかたはらの藁

葺の農家をさした。

門先の大きな柿の木の下には、豆殻が莚にひろげられて乾されながら黒くはじけてゐて、そのうへに柿の花が散つてゐる。日本風に耳の立つた黒い小犬が、シャツ一枚の二人の男の姿をみると、豆殻のうへもかまはず駆けずりまはりながら、赤ん坊らしいキャンキャン声をふりしぼつて吠えたけれども、家のものはみな野良に出てゐるか、人のけはひもなかつた。二人はだまつて家の横手のつるべ井戸の方に行つた。井戸のうへには梅の木がかぶさるやうに茂つてゐて、もはや黄色づきかけた実が、葉漏れ日に玉のやうにかがやいてゐる。庄司はつるべで汲んだ水を、まづ自分ががぶがぶと呑んだ。まるで水を呑むところまで馬みたいに達者だな、と、その咽喉から首から胸にかけてこぼれてくる清らかな水のしたたりをみながら、晋一はおもつた。それから庄司の手から渡されたつるべ桶をかたむけて、顔中にしぶきが快くかかるほどに傾けて、自分の咽喉もうるほした。

「だが、水もいいが、この梅の実の方がもつと胸がすつとするぜ。——俺の郷の梅もこんなだつたな。」と庄司は梢をふりあふいでゐたが、急につるべの竿をとつて、ぱらぱらとその梅をおとし、すばやく拾つてそれを水で洗ふと、しかめ面しながらも、「うまい、うまい。」といひつづけて一つ二つ嚙り、晋一にも一握り手わたしした。一ぱん黄色いのを半分ほどかじつてみると、口中に水がこぼれ出すやうに酸つぱかつたので、おもはず顔をしかめると、「はッはッ」と庄司が腹をかかへて笑つた。その声にやうやく気づいたのでもあらうか、裏手の豌豆畑の方から、紅や白の立葵の花がむらがつた垣根のところを抜けて、姉さんかぶりした娘が庭に入つて来て様子をうかがつた。白い手拭のかげに、円い褐色に日に焦げた顔が、眼のあたりから下をみせてゐる。驚いてゐるやうでもあり、怒つてゐるやうでもあり、また笑つてゐるやうでもある。荒い紺がすりの仕事着と、黒い脚絆とのあひだには、やはり褐色の脛坊主がのぞいてゐる。

「すみません。すみません。」と庄司はいつて、晋一をうながし、「さあ走らう。このあひだにも大分時間を取つちやつた。」といひながら、梅の実を鉢巻の中に三つ四つはさむと、一散に駆け出した。

「君は君の速度で後からこい。だが頑張るんだぞ。」と、馬のやうに脚をあげて庄司が駆けながら叫んだが、晋一はどこまでも庄司に喰つついて離れないぞといふやうに、いつしよにかたまつて走りつづけた。

後では、小犬の鳴声にまじつて、娘の笑ひ声が、日の光にあかるくとけながらひびいてゐた。庄司は照れ隠しのや

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook